

先君義公○德川嘗造套杯。小者書知字、仁次之、勇最大、常以此勸客、時肥後侯以豪飲聞、公屢與之對酌、嘗招飲於小梅環景樓、侯既醉、泛墨水而去、公曰、此人似未盡量者、乃上舟、迅楫追及、復張宴舟中、蓋用此杯云、

〔傍廂後編下〕大盃

又淺草の並木邊に浮む瀬といひしあり、こゝにも大盃くさくあり、江戸より京都迄、五十三の盃、いづれも其處の廣狹賑淋によりて、盃の大小深淺をわかちたるなり、

〔假名世説下〕江戸座の俳諧師神田庵が家に、紀文が涼の酒盃と稱するものを收めてありしを、みたる人のかたりしは、何も別に工せる事もなき朱塗の盃にて、世にいふ小原の形したり、内は鐵線からくさを、猫の畫にしたるものなりき、神田庵主の話に、むかし紀文盛なりし頃、一とせ夏の事なりしが、その日紀文は淺草川に船あそびするよし、世間にいひもてふらせしかば、いかなる遊びをかするならんと、是を見物せんとするも、其日にいたりぬれば、われおくれじと競ひて舟に乗りしかば、川の面は水の色さへ見わかぬまでに、所せくもやひつれ、今や紀文が舟は來りなんとて待ち居たりしに、夕日かたぶく比にもなりぬれど、それぞと覺しきもみえねば、後にはこゝ、かしこふねをさゝせて、尋ねめぐるも多かりや、ともしつくる比にもなりぬれば、こゝにも盃流れきたりぬ、かしこにも取りあげたりなど、いひの、しりて、やがて舟のうちどよめき、見物に出でし數艘の舟、後は酒のみ歌うたふ事も、せで川づらのみ守りゐて、たゞさかづきの流れやらんことを待ちて、夫のみあらそひ興じけり、こはまさしく紀文がなしたるわざなるべし、いざみなかみを尋ねばやと、舟を墨田綾瀬のほとりまでもさしのぼせ、いたらぬくまもなくさがし求めけれども、其夜はさらに紀文が舟をば、見あたらざりしかば、夜ふけ興つきてみな人歸りぬとぞ、紀文は其日舟あそびに出づるとのみ、いひふらしおきて、自分は家にありて盃ばかり